

2023

4

令和5年4月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻356号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とまろお



公益財団法人
さわやか福祉財団

永くその多大なる功績への感謝として 「永世名誉パートナー」の称号を お贈りしました

会長退任に関するご報告



この度、当財団の創設者であり、長らく会長を務めてまいりました堀田力が、本年3月31日をもちまして、会長及び理事を退任することとなりましたので、お知らせいたします。

1991年の当財団立ち上げ以来、大変長きにわたり、全国の皆様に多大なるご支援を賜りましたことに心より御礼申し上げます。

退任にあたり、さわやか福祉財団から「永世名誉パートナー」の称号を贈らせていただきました。

退任のご挨拶を本誌巻頭に掲載しております。ぜひご高覧いただければ幸いです。(→P2)

写真左から、さわやかインストラクターを代表して、創立当初から共に活動を進めてきた加藤由紀子さんと中村順子さん。写真右は、妻・明子さん。財団の活動をずっとあたたかく応援していただいた。

(本年3月13日、「ブロック全国協働戦略会議」KFCホールにて)



とあ言おう

2023年4月号

CONTENTS

- 2 **ご挨拶** **退任に寄せて**
誰もが自分を生かして幸せに暮らせる社会を
堀田 力
- 6 **新しいふれあい社会 実現への道**
人と人とのつながりが幸せを生む社会に
堀田力会長の退任に寄せて
清水 肇子
- 8 **広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から**
支え合う地域づくりにも貢献！ 中学生ごみ出しボランティア
～広がる「ここつなネット」の取り組み～
鶴ヶ島市社会福祉協議会（埼玉県鶴ヶ島市）
- 12 **いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう**
これで元気になりました！
老人クラブのシニアと小学1年生との遊びを通じた交流 丹 直秀
- 16 **「地域助け合い基金」助成先のご紹介／状況のご報告**
- 20 **連載 27** **老いの暮らしを創る**
思い立って「香住」まで 福祉ジャーナリスト 村田 幸子
- 22 **連載** **人生100年時代を生き抜く知恵** **ジェンダーの視点から 8**
姉が100歳になりました お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

新しいふれあい社会づくりに向けて

- 26 ご支援ありがとうございます。
さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介
- 27 NEWS&にゅーす
- 29 活動日記（抄）

- ㊦財団ツールのご紹介／㊧みんなの広場／投稿募集
- ㊨さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内／表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと・鎌田 實

退任に寄せて

誰もが自分を生かして幸せに暮らせる社会を

さわやか福祉財団 前会長 堀田 力

この度、本年3月末日をもって、さわやか福祉財団の会長及び理事を退任致しました。長きにわたりさわやか福祉財団の活動を応援いただき、本当にありがとうございました。

昨年12月19日に突然脳梗塞に襲われ、以来リハビリに努めていますが、残念ながら体調に大きな影響が残りました。左側半分が見えなくなり、人名や地名の記憶がなかなか出でず、漢字を読むことが難しい状況です。体力が落ちており連続歩行も今はまだ1ブロック程度で、一人で外に出ることは危ないため家族に支えてもらっている毎日です。このような状況では適切に会長職を全うすることはできないため、退任することと致しました。

これまで全国の多くの皆様に熱い激励と多大なるご支援をいただきました。心から御礼申し上げます。

おかげさまで、会話をすることはまったく問題なく、思考を巡らすことも不自由はありません。

ん。これまでのように全国に出向いて皆様とお目にかかることは難しくなってしまう残念ではありませんが、体調の回復にさらに努めながら、これからは近隣地域を中心に、できる役割に少しでも取り組んでいければと考えています。

*

*

*

「新しいふれあい社会」という目標を掲げて助け合いの活動を始めて30年になります。その間、ご承知のとおり、日本は経済面、社会面で停滞が続ぎ、むしろ世界の先進諸国にどんどん後れを取ってしまったります。

しかしながら、社会全体の力が失われていく中で、みんなが助け合って、新しいあたたかな関係を結んで、お互いの力を引き出していこうという私たちの活動は、着実に力を付け、世の中に根付き、定着してきました。

NPO法ができ、各地でNPO活動が広がり、多くの人たちが大活躍してくれています。また、自治会も自分たちの力でもっと良い地域にしていこうと自主的に動きはじめております。こうした取り組みが、みんなが幸せになる方向に日本社会を進める大きな力になっています。自分自身が助けてもらう立場となり、改めてその力の大きさを実感しています。

今、世界の経済、社会変革のスピードは非常に速くなっています。日本は経済的に厳しい状況にあり、デジタル技術も急速に進歩していく中で、世界の先進諸国のトップを切っていると

は決していえない状況です。ではこれから、少子高齢化が急激に進んでいる日本で、どのようにもう一度力を取り戻していけばいいのでしょうか。

デジタル技術は国を超えて相当な勢いで広がりますから、さほど時間をとらずに必ず伝播・伝達され、追いついていけると考えられます。何よりも大切なのは人の面です。すべての人が幸せになる社会をみんなで築く必要がありますが、これはおおよそ簡単なことではありません。

まず人はそう簡単に変わりません。性格、能力、いろいろと頑張っても一挙に変わっていくことはとても困難で、ここが技術と違うところです。

すべての人が自分の能力を生かして、幸せに生きる社会、その人が持っている能力を、どんな人であっても認め合って、すばらしいよねと励まし合い、感謝し、喜びを分かち合う。こうした社会をつくることこそが、日本、そしてどの国にとっても、実は一番必要なことなのです。

今、子どものことが社会で大きな問題になっています。特に幼い子どもの頃がとても大切です。子どもの頃から受験戦争に巻き込まれ、勉強を強いられる状況では、自己肯定感も頑張ろうという意欲も湧きません。学ぶ楽しさも人生の楽しさも生まれず、お金さえ儲かればいい、ただ地位が高ければいいといった非常に危ない、歪んだ価値観のために、心の活力が奪われています。

そうした社会にしてしまったのは大人の責任であり、本当に申し訳ないことです。だからこ

そ、みんなが必要な環境を意識して創り出す必要があります。幼い頃から社会のあたたかさ、生きる楽しさに触れられるように、誰もが自ら幸せになれる、そして人も幸せにできる、そうした自信を持って生きられる社会に、ぜひさらに向かっていってほしいと願っています。

誰もが持っている能力を活かせる社会、「助かってるよ、ありがとう、すばらしいね」、そんな言葉をいきいきと掛け合える社会こそが、冷たい競争社会に比べて、ずっとみんなが幸せになる社会です。そういう社会を私どもは目指しておよそ30年、全国の多くの仲間の方々と一緒にやってきました。私自身が病気をして、改めて助け合いはこんなにも人を安心させてくれる、幸せにするものなのだと、心底実感しています。

全国の皆様方とこれまで活動を進めることができましたことは本当に幸せでした。そうした人生を送れたことは感謝しかありません。

どうぞこれからも皆様それぞれが、持てる力をいきいきと発揮され、ふれあい、助け合いながら、さらに大きなみんなの幸せをつくり出せるように願っています。

私自身も皆様と同じ思いを胸に抱き続け、これからは近隣の小さな範囲ではありますが、地域の人たちと共に少しでも多くの人の幸せづくりに役立てますよう、頑張ってます。

みんなで力を合わせて進めていけば、必ず、目指す幸せな社会への道につながっていくだろうと信じています。

人と人とのつながりが

幸せを生む社会に

堀田力会長の退任に寄せて

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

堀田さん、と、敢えて普段どおりに言わせていただく。日本内外に大きく名を馳せた功績と地位をあつさりと捨て、一市民として、たった一人で私財を投じて任意団体の活動を始めたのが31年前。先生と呼んではだめ、市民活動なのだからみんなフラットで行こう、それが最初から堀田さんが示してくれた姿だった。

新しいふれあい社会の創造―。今の時代にあつた形で多様な個性を重んじながら、ふれあい、助け合い、みんなであたたかい社会を創ろうという呼びかけとその生きざまに、社会から大変な反響が寄せられた。定年退職前の転身ぶりに驚き、もつたいないという声もあつたが、それをすぐに打ち消すほど、全国の本当に多くの人たちから、熱い共感と応援が寄せられた。寄付で応援するという声と共に心のこもった支援も次々と届いた。

その頃、私はちょうど仕事と暮らしにおける自己実現をどう可能とするか、キャリアアプランニングやライフマネジメントを仕事としていた。堀田さんの呼びかけは、私自身が取り組んで

いた仕事とも重なり、多くの方々と同様にその目指す社会のあり方に大いに共感した。縁あって一緒に活動をさせていただき、およそ30年。様々な教えを得て、何ものにも代えられない心の財産と多くの学びをいただいた。

堀田さんは、最初から一貫して、変わらずに訴え続けた。〝もっともっとみんなで頑張つて、みんなで幸せになろうよ、みんなの力を生かしていこうよ〟と。そして、〝誰もが助け合いの遺伝子を持っている〟と。それぞれが持っている能力を思い切り生かして、自分の幸せと人の幸せを創り出していく、これからの日本は、そんな生き方、社会を目指すべきなのだ。

個の多様性を認め合い、主体的に社会とつながり合い、支え・支えられるという双方向の関係を大切にする。働きかけ続けてきたこれらのあり様は、まさに今、地域共生社会という姿に昇華して、その骨格となる考え方となった。

当初から「財団で肩書だけのような役職は不要」と明言されていた堀田さん。退任後、名誉会長や顧問を名乗ることもない。私たちは、創始者としてその多大なる功績を讃え、心からの感謝を込めて、さわやか福祉財団の「永世名誉パートナー」の称号をお贈りすることとした。〝いつまでも共に、新しいふれあい社会づくりを目指す変わらぬ同志（たいてい）〟という皆の思いを込めている。

AIやDXといったデジタルによる急激な社会変革を迎えている時代だからこそ、さわやか福祉財団は、人と人とのつながりから生まれる社会的価値、創造性を強く訴えかけていきたい。ぜひ引き続きご支援をいただければ大変ありがたく存じます。

これまで皆様と共に進めてきた皆の幸せをつくり出す活動が、さらに全国津々浦々の地域に広がっていくように、新しいふれあい社会づくりを進めていこう。皆でさらに、もっともっと！



支え合う地域づくりにも貢献！

中学生ごみ出しボランティア

広がる「ここつなネット」の取り組み

実践的な学びの場として
小中学生ボランティアを育成

埼玉県中部に位置する人口約7万人の鶴ヶ島市。「支え合いのまちづくり」を掲げる同市では、高齢者らの孤立を防ぐと、子どもたちの力を借りて地域づくりを進めている。市社会福祉協議会が取り組む、中学生ボランティアによる高齢者世帯のごみ出しの手伝いもその一つだ。

鶴ヶ島市社会福祉協議会（埼玉県鶴ヶ島市）

地域共生社会の実現には、さまざまな人たちが参画し、世代や立場を超えてつながり合うことが大切です。その取り組みの一環として、鶴ヶ島市社会福祉協議会では、中学生が活躍するごみ出しボランティア活動を推進。彼らが活躍する姿は地域の人たちに元気を与え、ご近所同士による見守り・声かけ・交流活動などの地域づくりにも発展しています。（取材・文／城石 眞紀子）

「きっかけは、小規模多機能施設のケアマネジャーから利用者さんのごみ出しに関する相談を受けたことでした。実 は 過 去 に も、同 じ 団 地 に 住 む 中 学 生 が 高 齢 者 の ご み 出 し を 手 伝 っ た 事 例 が あり ました。加 えて、私 たち の 社 協 で



ごみ出しボランティアの様子



市社協の大井さん

は若い世代への地域福祉への関心を高めてもらうために、福祉教育やボランティアの体験学習を推進しています。実践的な学びが子どもたちの成長を促しますし、地域の中で顔の見える関係をつくるのが大事でもあるので、定期的に支援できる子がいるならば手伝ってもらおうということ、2019

年から始めたのがこの中学生ごみ出しボランティアです」

こう話すのは、ごみ出しボランティアのコーディネートを担当する、市社協地域づくりグループの大井清子きよこさん。担い手は、当初は依頼者の住所から学区を調べ、通学路上にやってくれそうな子がいないかを中学校側に聞くなどして個別に探していたが、22年度からは学校の許可を得て、地域ボランティアを募る仕組みをつくり、それを基にマッチングしている。「4月に市内の全小中学校と高等学校1校に協力依頼の文書を送り、やってほしいという子に申込書を提出しても

らいました。これまで40人以上の中学生がごみ出しボランティアとして活躍。小学生でもやってくれる子たちがいました」

活動を開始す
活動の様子について、依頼者と担い手、周囲の人たちに話を聞いた。この3月に中学校を卒業するまでの2年半、ごみ出しボランティアをしたきた鶴ヶ島市立西中学校の福嶋龍りゅうさんと工藤颯太さつたさん。2人は近所に住む一人暮らしで足の悪い蜂谷好子ちよこさん（88歳）からの依頼で、登校前に週3回のごみ出しを分担して担ってきた。「学年主任の先生から話を聞き、続けられるかどうかは分からなかったけれど、家も近かったし、人の助けになる

週3回のごみ出しを 2人で分担して2年半継続

る際には、依頼者と担い手が市社協担当者を変えて顔合わせし、詳細を打ち合わせ。担い手にはボランティア保険に入ってもらうほか（保険料支払いは依頼者）、市社協担当者とはLINEなどでつながり、連絡が取れるようにしている。



福嶋さん（左）と工藤さん

蜂谷さん

のならやってみようと思いました」とは福嶋さん。工藤さんは、「ごみ出しをする日はいつもより家を5分くらい早く出るんですが、習慣になってしまえばそこまで大変じゃなかったです」と振り返る。依頼者の蜂谷さんは、「夜のうちにごみを出しているので、お兄ちゃんたちと顔を合わせることはないんですが、ごみを持って行ってもらっ

た後のごみ箱に手を合わせ、毎回『ありがとうございます』と言っています。本当に感謝しています」とそれぞれに話してくれました。

活動中にはこんなこともあった。ある日、いつもの場所にごみがないときに「大丈夫かな？」と心配になった工藤さんがお母さんに相談。お母さんから市社協に連絡してもらい、無事を確認したが、これを機にごみがない日は「今日のごみはありません」というカードを、ごみ箱にぶら下げておくルールもできた。

そんな2人の活動をそばで見守ってきたお母さんたちは、「思春期の男子だからそんなに話はしないんですが、工藤君も一緒だったので気負わずできていたようです。息子自身、とても良い経験になり、声をかけていただいよかったです」（福嶋典子さん）、「部の活の朝練があるときは朝5時台に家を出ていたので、真つ暗な中でごみを取って収集所まで持っていく、学校に行くのは、わが子ながらすごいなと思って見ていました。市社協の大井さんも『無理なくできる範囲で構わない』と言ってくださったり、蜂谷さんのほうでも子どもが持ちやすいようにごみを小さくまとめてくれたりもしていたみたいなので、そういう部分もありが良かったです」（工藤一美さん）。

ご近所もチームで見守り。 ボランティアは 自分を成長させてくれるもの

また、近所の人たちも蜂谷さんや中学生をさりげなく見守っている。

日頃から蜂谷さんのことを気にかけて、「何かあったら言ってくださいね」と声をかけているのは、隣に住む田島真由美さん。「小学生が集団登校するときには私たち保護者は外に出て見守りをしているのですが、そのときにはお兄ちゃんたちにも『いつてらっしゃい』と声をかけています。年頃なのに面倒臭い顔もせず、『いつてきまーす』と返事してくれるんですよ」。元民生委員でもある自治会長の武田和子さんのところには、ごみ出しボランティアが

始まった当初、「よその中学生がごみを出している」との連絡が入って、事情を説明したこともある。

こうして、ごみ出しボランティアから発展したご近所ネットワークができたわけだが、市社協では、このように見守り支援が必要な高齢者と地元の小中学生や住民ら5〜6人で個別チームをつくり、ご近所同士による見守り・声かけ・交流活動を進める「ここつなネット」（心と心をつなげるネットワーク）（心と心をつなげるネットワーク）事業を推進している。

「事業を始めて2年。開始当初は災害時の避難行動要支援者のうち、見守りを希望された方を対象としていましたが、今は支え合いを希望する誰もが対象であり協力者となって、お互いに見守り合うチームづくりを進めて、市内ではすでに260チーム以上が結成されています」（大井さん）

武田さんは「チーム蜂谷」の調整役としてコーディネーターも務めている

が、「今では近隣の人たちの活動への理解も進み、『すごいお兄ちゃんたちがいる』とみんなが温かな目で見守っています。こうやってご近所同士のつながりができると、災害時だけでなく、普段からお互いに安心して暮らせますよね」とここつなネットの意義を語る。

最後に、このボランティア経験についての感想も本人たちに聞いてみた。

「ボランティアをするかしないかはその人の意志。やったからといって直接的な対価が得られるわけじゃないけれど、例えば時間の使い方に対する意識が高まったり、人のために何かすることとは自分のためにもなるということが分かり、自分を成長させてもらえました」（福嶋さん）、「ごみ出しをやっているうちに近所の人たちが自分を見る目も、自分が近所の人たちを見る目も変わってきた気がします。ボランティアって人を助けるだけじゃなく、地域や周りの人のことを知ることにもな

る、すごくいいものなんだと思います」（工藤さん）。

自然体でこんなふうに話せるなんて、なんと頼もしい。卒業を迎えて2人は、ごみ出しボランティアを引き継いでくれる後輩を、先生と相談しながら探してくれてもいるそうだ。福嶋さんは宇宙に携わる仕事を、工藤さんは世界を飛び回る仕事をしたいというのが、この経験を生かしてどんな大人になるのがとても楽しみだ。また、つながる周りの大人たちの温かさも印象的で、こうした多世代による地域づくりの取り組みが各地で広がっていくことを願いたい。

鶴ヶ島市社会福祉協議会

●連絡先 / 〒350-2217

埼玉県鶴ヶ島市三ツ木16-1

電話 049-271-6011

いいきいき わくわく



子どもと一緒に
地域で輝こう



これで元気になりました！

老人クラブのシニアと

小学1年生との遊びを通じた交流

丹 直秀

少子高齢化、核家族化が進み、子どもを取り巻く社会の環境が大きく変わっています。人と人とのつながりは、子どもの心を豊かに育み、そして関わるみんなが元気になります。今月号から「地域と子ども」をテーマとした企画をお届けします。ぜひご覧ください。

● 節分のもあそび

今年2月3日（金）は節分。風はまだ冷たいが春を感じさせる好天のこの日、横浜市港南区のひがしやま日限山小学校で、1年生（2クラス50名）と地域シニア（30名）が一緒に遊ぶ「むかしあそび」行事が開催された。

協力はこの地域の老人クラブ連合会。10年ほど前に小学校のほうから話があって始まり、その後毎年恒例行事となっていたが、3年前からコロナ禍でやむなく中断しており、このたび久しぶりに再開したものだ。私は、さわやか福祉財団のボランティアとして、また、この小学校の近くに住むシニアの一人として、地域シニアと子どもとの



子どもたちとシニアの皆さんが学校体育館でご対面

トがあり、ぜひ全国各地の学校や老人クラブで展開してほしい」と思った。もちろんすでに実施してきた学校も多いようだが、コロナ禍以来途絶えているところが少なくないと聞く。以下、今回の「ともあそび」（日限山小学校では「おかしあそび」）体験のあらましと、シニアとしての自分の感想をまとめてみた。

「ともあそび」
に関心があり、

今回初めて参加
してみた。

結果は、「予想以上
に楽しく、参加して良
かった」。そして、「このよう
な催しは、シニアにも子
どもにも大きなメリツ

● 学校、地域の連携プレー

時間帯は10時半から12時までで、場所は教室の一つと、体育館が使用された。当然学校側の協力が欠かせない。日限山小学校の場合、子どものお勉強以外に、人生経験の豊富なシニアと子どもとの遊びの効果が大きいことに早くから学校側が気づいていた。そこで、生活科の時間の一つとして保護者の理解を得た上で、地元の老人クラブに



子どもたちとシニアが真剣な面持ちでともあそび

協力を求めることとなり、当時の老人クラブの代表に打診したところ、快く協力してもらえたことになった。当時の代表が日頃から小学校側と連携ができていたことも幸いし、遊び



道具（おはじき、お手玉、けん玉、羽子板、コマなど）を学校側で準備し、授業の一環として位置付けられているので推進力になった。

● シニアと子どもの受け止め方

この小学校区は、約8000人が住む戸建ておよび一部マンションで構成される住宅団地の一画にある。戸建て団地は完成からすでに50年以上が経過し、住民の高齢化率は50%に近い。シニアの子どもたちの多くはこの地を離れており、後期高齢者も80歳代以上が多く、一人暮らしも珍しくない。したがって、日限山小学校の子どもたちの多くは、最近この地域に移り住んだ若い世代の子どもたちだ。戸建てにしても、マンションにしても、その子どもたちが近所の子と外で遊ぶような場所には、小さな公園以外はほとんどない。いずれにしても、普段は接点のない地域のシニアと子どもたちだが、にわかに学校で一緒になっても、遊びとはいえお互いうまくコミュニケーションが取れる

ものか。シニア側にも、いまさら…というような抵抗感はないのだろうか。とりわけ今回は、3年ほどコロナ禍でブランクがあった後だけに、それぞれの受け止め方に懸念もあった。

● 案ずるより産むがやすし

ところが意外。双方が体育館で挨拶を交わした後、好みの遊びでいくつかのグループに分かれ、はじめのうちはシニアが先生役で、「けん玉のコツは膝だよ、膝」などとやかたを教えているうちに、自然に子どもとの会話が弾み出し、子どもたちもとにかく恐る恐るやってみると…意外に面白いし、友達どうしのつながりも実感できたりした後半にはすっかり夢中になっていた。

シニアはシニアで、自分自身の子どもの頃を思い出すので「回想法」（認知症の予防法）にもなり、子どもも相手に自然におしゃべりをしたり体を動かしたりするので適度な運動にもなり、気持ちの良い時間を過ごすことができた。

●「これで元気になりました」

…シニアのメリット

始まる前、立ち話で隣のIさん(70歳代の男性)が私に語りかけた。

「これに参加して自分の認知症が治ったんですよ(笑)」

…病院で認知症と診断され、治療も受けていたI

さん。外出には奥

さんの同伴が欠かせないほどだった

のが、老人クラブ

に誘われてともあそび(むかしあそび)

に参加しているうちに物忘れな

どの症状がなくなり、気がついたら

普通の生活に戻っていた。今は老人クラブの活動

にも一人で参加できる。医師の言うには、「こどもと遊ぶなど、外に出る生活が効いたのですね」と

認知症でなくても、ともあそびで子どもの相手をするうちに元気になり、生きがいを取り戻すなどの例は少なくない。「ともあそび」に参加して一

番喜んでるのはシニアの側かもしれない。

2時間近く一緒に遊んだ後は、帰宅するシニアも教室に戻る子どもたちも晴れ晴れとしていて、その顔つきはまさに「福は内」だった。

シニアの方々、外に出よう！「ともあそび」を、

さあ、やろう！

* * *

当財団では、乳幼児からを対象として、地域のさまざまな人たちと遊びを通じて共感力を育む

「ともあそび」をおすすめしている。皆さんの地域でも取り組んでみてはどうだろう。財団ホーム

ページ(下記)に冊子も掲載しているので、ぜひご活用いただきたい。

財団HPアドレス <https://www.sawayakazaidan.or.jp>

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、大規模団地の一人親家庭などへのお弁当配布の活動、住民参加型有償サービスの活動、ママ友同士で立ち上げた子ども食堂開催を目指す活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

福島県郡山市

大規模団地で一人親家庭や生活困窮者などにお弁当を配布

つばさ会

助成金額 14万8000円

つばさ会は2017年に設立。1000世帯ある希望ヶ

丘市営団地の集会所で週1回子ども食堂を開催、一人親家庭の親子や一人暮らし高齢者を対象として、夕食のお弁当

と寄付された品の配布も行ってきました。また、年4回のイベントを地域の食堂と合同で実施し、さまざまな体験活動を通じて家族同士や地域の人々との交流を深めたり、子どもたちの豊かな情感の育成に寄与しています。

団地には一人親家庭や生活困窮者以外に、コロナ禍でさらに収入が減り支援を必要としている人も多くなりました。朝食を食べられずに登校する小中学生もいると聞き、少しでも満足いく食生活を送れる支援がしたいと、本基金の助成に応募されました。助成金は、毎回のお弁当代、消耗品費、光熱費等に活用していただきました。お弁当配布の



お弁当や食料配布の様子

おかげで、利用者は時間的、経済的、精神的に余裕ができて、そのぶん子どもたちと楽しくあたたかい時間を過ごすことができたようです、と報告を下さいました。

毎週活動していることで、他の団体や企業からたくさんのお寄付があるものの、今は限られた人しか配ることができていないので、今後はもっとたくさんの方の一人親家庭に配る方法を考えたいとのこと。子どもたちの休業日には学習支援も行っていけたら、と考えているそうです。

住民参加型有償サービス事業
「お助けネットかたおか」のご案内

高齢者や障がい者等の方が日常生活で困った時に地域の支え合い活動の一環として住民同士が生活支援等を有償で行う事により安心して地域生活が送れる事を目指します。

- 活動内容 調理、洗濯、掃除、買い物等の家事、ゴミだし、屋外清掃、雪かき、簡単な大工、灯油入れ・灯油注ぎ、話し相手、趣味・娯楽の相手など地域生活を送るために必要な支援。
※住民の助け合い活動として、できる範囲で活動します。
- 利用料 30分 300円(事前にチケットを購入)
※調理・荷物送付の場合は、調理代・駐車料金等の実費追加のみ
- 活動時間 午前8時30分～午後5時
- 利用の流れ 裏面をご覧ください。

お申込み
お問い合わせは

午前8時30分から午後5時までに
 片丘地域づくり協議会事務局(市役所 片丘支所内)
 ☎399-0711 塩尻市片丘475-8-7

活動周知のためのチラシ

「片丘地域づくり協議会」で負担してきましたが、コーディネートターへの謝礼、活動費用の不足が課題となっていたため、本基金の助成に応募されました。助成金は、活動経費のほかに、活動周知のためのチラシ作成と配布の費用、コーディネート業務に活用していただきました。

送迎、雪かき、草刈り、話し相手等を行うことができました。

お助けネットかたおかでは2019年から、住み慣れた片丘地区で、住民同士が安心して暮らせる地域づくりのための仕組みとして、住民参加型有償サービスを実施。高齢者や障がい者など日常生活に支障のある人を対象に、調理、洗濯、清掃、ごみ出し、灯油注ぎ、通院や買い物

長野県塩尻市

住民参加型有償サービスを展開 さまざまな課題の解決に取り組み

お助けネットかたおか

助成金額 15万円

片丘地区には医療機関がなく、医療との連携が難しいところが今後の課題となっているほか、利用者と支援者を増やすこと、他地区との連携も必要。また、医療や介護の知識など専門性のあるコーディネーターの養成も課題と考えているそうです。今後は、一地区では解決できない課題に市を巻き込んで活動を展開したり、高齢化社会に先進的に取り組んでいる他地区の活動を調べたいということです。

「超高齢化は全国的な問題。一つの市や地区で考えるのではなく、大きな課題として問題意識を共有する必要があります」と報告を下さいました。

茨城県日立市

ママ友たちが子どもや若者の支援活動開始 誰もが孤立せずに暮らせる地域へ

NPO法人 izumi

助成金額 15万円

NPO法人 izumi は、子どもや若者の支援をしたいと2021年にママ友で立ち上げた団体。今後、子ども食堂やコミュニティカフェをオープンし、居場所を求める子

どもや若者たちに寄り添い、必要があればアウトリーチにつなげたいと考えています。コロナ禍においては、生活困窮家庭や一人暮らし高齢者に栄養のあるお弁当を提供し、コロナ後にはたくさんの人と一緒に食事してもらい、話を聞いて困っていることに必要な支援をしていこうとしています。

本基金の助成金は、食堂のチラシ印刷代やスタッフの細菌検査代、調理器具やお弁当の食材費に活用されました。実際に始めてみると、飲食を提供する際の安心安全のための検査等に予想外の支出があり、助成金が大変役立つたということです。

活動を開始して、子育て真っただ中の家庭や一人暮らし高齢者と関わりを持ち、打ち解け、親しくなれたとのこと。また、市や市社会福祉協議会、地域の交流センター等の人たちのバックアップに触れ、それらに応えていきたいとも思ったそうです。「私たちは、多世代で地域の子ども



お弁当や
食料配布の様子

「地域助け合い基金」 状況のご報告

たちを育てていきたい、誰も孤立せず楽しく暮らせる地域づくりを目指していきたいと思っております。もちろん弱い立場や子ども・高齢者に目を向けていきますが、地域の

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。
3月15日までの状況をご報告いたします。

（3月15日 当財団ホームページ開示時点）

◎寄付受付額

216件

3166万8836円

このほかに当財団より1億2000万円を供出

◎助成実行額

886件

1億4118万1064円

地域助け合い基金は、地域共生社会の実現を目指し、助け合い活動のスタート・継続を支援しています。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願ひ申し上げます。

（事務局長・内田）

皆さんが自分だけではなく、周りの困っている人々に気づいて気遣える、そんな場所にしていきたいです」と報告を寄せてくださいました。

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、
およびクレジットカード決済は、
QRコードもご利用
ください！

基金に関するご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

老いの暮らしを創る

思い立って「香住」まで

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

「あった」と、思わず声をあげてしまいました。山門の左手にそびえる巨木。ああ、ここだと40年以上も前

の記憶が、現地に立って鮮やかに蘇ってきた。兵庫県の香住^{かすみ}にある大乘寺。通称、応拳寺。円山応拳の襖絵が13年振りに収蔵庫から出され特別公開されています。NHK大阪放送局に勤務していた時代、取材で大乘寺を訪れているのですが記憶が定かではなく、イライラするばかり。それならと、期間も残りわずかという3月初めに思い立って出かけてきました。

京都から山陰線に乗り換え、特急はしだいで福知山へ。ここで大阪から来る友人と合流

し、特急こうのとりで城崎温泉へ、そして普通列車で香住までという道のりでした。ところが山陰線へ乗り換えた途端、電話が。

「ゴメン、乗り遅れた。1本後のこうのとりで行くから」。それからはラインのやりとりで調整し、私に時間的余裕が出来たので城崎温泉で途中下車しました。温泉街を散策しながら立ち寄った城崎文芸館では、志賀直哉が、お饅頭に砂糖をかけて食べるほどの甘いもの好きだったということを知り、友人のうっかうまく友人とお蔭で、旅のおまけをもらいました。山門にそびえる巨木を見つけたのです。ああ、



ここだ、ここだ。

東京でいくら記憶の糸を辿っても思い出すことには限界があったのですが、その土地に立って初めて、昔がより一層今に引き寄せられました。共に取材に出かけた仲間の顔、近辺の変わらぬ風景、絵はがきを買い求めた時の様子など次々に。しかし応挙の襖絵に何を感じたのかは全く、というお粗末さです。

翌日、いそいそと出かけました。山門をくぐり実直そうな応挙さんの銅像に迎えられる寺内へ。襖絵は応挙の苦しい時代、当時の住職がその才能を見込んで学資を援助し、その恩返しとして客殿の建築時、応挙が弟子たちと共に襖絵を描いたと伝えられています。災害や腐食から守るため複製画が展示されていましたが、13年振りの原画公開とあって、連日大変な人気とか。入った途端目についたのは「建物に必要以上の負荷がかり、天井に歪みが生じ、床が破損し

かねないので2階の内拝は中止する」という貼り紙でした。お寺さんも応挙人気にさぞ慌てたことでしょう。

十一面観音が安置されている仏間を中心に十の客殿が取り囲み、その一部屋一部屋に応挙とその一門が襖絵を描いています。応挙による「老松と孔雀図」。十六面の襖を開け閉めしても、景色は成立します。また光の差し込む角度まで考えて描かれていることを、案内人が電気を消して感じさせてくれました。同時代の絵師若冲の、極彩色で緻密な絵には息苦しささえ感じますが、応挙のそれは、緻密ではあっても柔らかくゆったりとしていて、心にしみ入りました。

昔の記憶を辿る旅は、自分の人生が活気と彩りに満ちていた頃を蘇らせてくれました。それはこれからの人生をも勇気づけてくれるでしょう。片道7時間の香住は実に遠かったです。でも行って、本当に良かったです。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

ジェンダーの
視点から
人生
100年時代を
生き抜く知恵 8

姉が100歳に なりました

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子



(そでい たかこ)

お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族 変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路 男の末路』（中央法規）、など多数。

去る2月11日、一番上の姉が100歳の誕生日を迎えた。私の母方は長寿の家系で、母は98歳になる直前に他界し、その妹も同じくらいの年齢で亡くなっている。母の姉も80代半ばまで生きてきたので、当時としてはかなりの長命といえる。

100歳以上の人口数が初めて明らかにされたのは1963年。その数は153人であった。この年から厚生省（当時）は、100歳の誕生日を迎えた人に金杯を贈るようになった。その後、98年には1万人を超え、昨年はどうとう9万人を超

えた。

100歳を超える人が少なかった時代には、自治体の首長が花束をかかえて訪問し、その写真が地方紙や一般紙の地方版に掲載され、なかには100万円を贈るという自治体もあった。100歳以上人口があまりにも増大したため、金杯を贈る制度は2016年に廃止された。金杯を銀杯に代えたところ、経費が3分の1に縮小されたという。姉も銀杯と居住する区の区長名でわずかな祝い金を受け取っている。100歳は珍しくもないので、

区長が訪れることもなかった。

目下、姉は寝たきり状態だが、少々耳が遠くなった程度で、内臓的にはどこも悪くないという。歯もほとんど自前だ。90歳の時、無料の歯科健診を受けところ、「8020（80歳で自分の歯が20本以上）」を見事にクリアしているということで、世田谷区歯科医師会から表彰された。今でも肉が大好きで、時々ステーキが食べたいと言って、介護する娘たちを驚かせている。

姉は20歳頃に、お見合いでハンサムな陸軍軍医と結婚している。義兄は辛い戦地に赴くことなく、陸軍病院勤務で終戦を迎えた。その後、いくつかの病院や診療所勤務を経て、開業したのは50代も後半。医者とは言え、経済的にはあまり恵まれな境遇であった。

姉は、一貫して専業主婦。手先が器用なので、4人の子どもの服は、ほとんど手作り。細かな刺繍やアップリケがなされていて、見事な出来栄えだった。サイズが合わなくなって捨ててしま

うにはあまりにも惜しいので、親戚中を転々と譲渡されたものである。もちろん料理もほぼすべて手作り。既製品を使うことには大いに抵抗がある。介護負担を減らすために、私は宅配弁当の利用を勧めたが、絶対に嫌だと拒否されてしまった。

義兄は70歳で他界しているのか、かねてより姉は、「私は70歳で死ぬ」と宣言してきた。思いがけなく長生きしたことに、現在では戸惑っているようだ。結婚後、しばらくの間は、夫の両親や弟妹と同居するという複雑な家庭であったが、愚痴をこぼすこともなかった。熱心なクリスマスチャンデ、教会を通じてのボランティア活動にも熱心だった。しかし、さすがに最近では、「こんなに長生きしちゃって」とこぼすようになった。

100歳以上の人の9割近くが女性だ。現在高齢に達した女性の大部分が100歳まで生き延びる確率は非常に高い。「こんなに長生きしちゃって」と嘆かないよう、それなりの心構えと準備が欠かせないとつくづく思う今日この頃である。

助け合いの地域づくりに、 当財団のツールをぜひご活用ください

当財団HPトップページ「ライブラリー」→「各種広報ツール」から無料でダウンロードもできます。「新・助け合い体験ゲーム」は1,100円（税込・送料別）となります。

みんなでやってみよう！ 訪問助け合い活動

お互い様の気持ちを一歩進めて、自身の生活も、困っている誰かの生活も豊かにする「訪問助け合い活動」。主に高齢者の家の中で行う助け合い活動について詳しく解説しています。講師用解説書もあります。



いつでも誰でも行ける場所を 広げよう！

居場所ガイドブック

地域の絆を深め、助け合う関係を広げるための共生型常設型居場所をつくりましょう。居場所のつくり方、事例、活動への支援のあり方など、実践ノウハウが分かるガイドブックです。



新・助け合い体験ゲーム

地域の助け合い活動における、ニーズと担い手発掘を体験できるゲームです。助け合いをつくる関係者の研修や住民勉強会等で、効果的に活用していただけます。



【お問い合わせ・お申し込み】

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **NEWS & にゅーす**

- **さわやか活動日記** (抄)

- **2023年度
実施事業・プロジェクトの紹介**



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。

新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2023年2月1日～2月28日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日とずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (77件)

(都道府県別50音順)

| | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|
| 北海道 | 茨城県 | 松浦 隆史 | 静岡県 | 渡辺 浩一 |
| 木下 淑子 | 橋口 栄彦 | 丸山 哲史 | 朝田 充 | 奈良県 |
| 沢田 壮兵衛 | 栃木県 | 宮沢 邦子 | 古橋 和子 | 山出 哲史 |
| 寺上 洋子 | 飯島 恵子 | 山下 多鶴子 | 愛知県 | 広島県 |
| 丸藤 競 | 菅野 忠雄 | 神奈川県 | 加藤 さつき | 黒田 不二男 |
| 渡部 保代 | 群馬県 | 赤松 高明 | 北畠 映子 | 島本 照久 |
| 宮城県 | 篠原 宏子 | 木村 利雄 | 藤田 依子 | 福岡 亨二 |
| 氏家 郁郎 | 田中 恵子 | 佐野 美樹子 | 三重県 | 山口県 |
| 内海 春雄 | 埼玉県 | 菅原 敬子 | 片山 幾代 | 迫中 富美子 |
| 鈴木 進 | 小野内 智子 | 鶴山 祐子 | 三宅 修司 | 愛媛県 |
| 戸袋 勝行 | 中崎 朱美 | 渡辺 政勝 | 滋賀県 | 田中 徹 |
| 渡辺 典子 | 千葉県 | 新潟県 | 谷 仙一郎 | 佐賀県 |
| 山形県 | 石毛 英夫 | 鈴木 せい子 | 松浦 正和 | 西田 京子 |
| 高梨 英子 | 川口 清 | 長野県 | 京都府 | 大分県 |
| 福島県 | 小林 雅彦 | 筒井 庸子 | 加地 保裕 | 木ノ下 素信 |
| 須貝 一男 | 佐藤 悦子 | 水沢 芳夫 | 大阪府 | 宮崎県 |
| | | 河合 峯 | 遠藤 知賀子 | 柳田 泰宏 |
| | | 岐阜県 | 寺井 正治 | 沖縄県 |
| | | 原島 敏子 | 安居 正 | 上地 武昭 |

さわやかパートナー法人 (9件)

(50音順)

- アシードブリュー株式会社
- 近畿労働金庫
- 草野産業株式会社
- 品川成年後見センター
- 一般財団法人住友生命福祉文化財団
- 株式会社榎屋
- 株式会社日立物流
- 社会福祉法人緑成会特別養護老人ホーム緑の郷
- 社会福祉法人隣の会

一般で寄付 (3件)

(50音順)

- 松浦 正和 (1万円)
- 松原 彰雄 (3万円)
- 匿名希望 (1万8360円)



1年間の研修を終えて

1年間の学びを 教育現場で活用するために!!

東京都教育委員会 篠原 徹

昨年4月、研修生として初めて、担当する大阪府の枚方市地域包括支援センター圏域の情報交換会に参加しました。コロナ禍で介護予防の教室や取り組みが開催できないこと、高齢化率の上昇とともに地域づくりの担い手が不足していることが課題となっていました。遠慮がちで我慢をしてしまう住民が多く、民生委員との連携が不可欠。

世代間交流や顔の見える地域づくりを目指していること、第2層協議体のメンバーが地域の課題を把握し住民と一緒に取り組んでいることなど、助け合いの熱量を実感することができました。大阪府においては、「本音で語ろう!! 情報交換会」にも参加しました。この

会は、SC同士の横のつながりを充実させ、困ったときに聞くことができる仲間を見つけ、みんなでつながることや各地の取り組みを共有できるように、実行委員が中心となって企画されています。「地域の課題はSCだけでは解決できない」「学校の課題も担任だけでは解決できない」。正にその通りであり、一人で悩み、相談できないSCがいることをあらためて実感しました。仲間とつながり課題解決の方向性を共に考え、ざつくばらんに話し合えるこのような手法は、教育現場でも活用できる取り組みです。

また、昨年9月の「いきがい・助け

合いサミット in 東京」では、生活支援口ポット特別展示を担当しました。住民や関係者が「活用したい」と思えるような企画を検討し、出展企業6社との折衝業務を通して、管理職に必要な企画運営力や外部折衝力を向上させることができました。

教育の現場を離れ、地域住民が生き生きと暮らせる社会、住民が主役となり地域を支えていく取り組みの実現に向けて、「住民主体の助け合い活動」を実感できるようにしてきたことは、多くの現場に足を運び、現場の生の声を聞かせていただいたおかげです。東京都の児童や生徒、教職員にも還元できる実践を数多く学べたことに、心より感謝申し上げます。「学校の課題とは何か」「今、何をすべきか」を日々自問しながら、教育管理職としてリーダーシップを発揮できるように努めてまいります。

1年間誠にありがとうございました。

研修生に手を挙げて 本当に良かったです！

神奈川県 沼上 悦子

濃密な経験をさせていただき、あっという間に駆け抜けた1年間でした。

ようやく状況が見えるようになり、さまざまな方とのつながりができ、あんなこと、こんなことを企画してやっていきたいと思うことが湧いてきていたので、あと1年あればと思いつつ、このエネルギーや経験は、神奈川県庁に戻ってから生かしたいと思います。

私は、山梨県と神奈川県を担当させていただきました。山梨県は、県および市町村職員の方もSCの方も、本当に真っ直ぐで熱心で行動力があって素晴らしい、市町村を超えて人と人とのつながりがあり、市町村と県の連携もあり、県や市町村の役割はこういうことなのだと学ぶことができました。

神奈川県は、外から見たからこそ思

うところがありました。もつと助け合いについて理解を深めてほしい、県内のSCや行政職員が市町村を超えてつながり情報交換や相談ができる関係を築いてほしいと、昨年12月に助け合い活動体験ツアーを企画・実施しました。9名の参加があり、「ふらっとカフェ鎌倉」に協力をいただき、代表やボランティア・参加者から立ち上げの経緯や活動・感想をお話いただきました。食品ロス削減・食料支援の食品管理を行っている倉庫の見学や、レストランなど店舗の休日を利用して実施している移動式地域食堂を訪れ、助け合いを体感して理解を深めました。ツアー参加者同士も、自身が行っていることや苦労していることなどを話し合い、距離がぐっと近づいていることが印象的でした。ツアーで感じたことを自分の市町村で生かしていただき、活動が促進されたらと願っております。

居場所や助け合いをもつと学び神奈

川県に広めたいと、新潟市「実家の茶の間・紫竹」、山形県天童市「のくんびり茶の間」、静岡県袋井市「あえるもん」に訪問して、それぞれ河田瑋子さん、加藤由紀子さん、稲葉ゆり子さんからお話を聞かせていただきました。温かく居心地の良い空間や人のつながりを肌で感じて、「百聞は一見に如かず」とはこのことだと思いました。

子ども・子育て市民委員会にも携わりました。昨年11月の発足シンポジウムは、登壇者も参加者も、安心して子どもを生み育てられる社会をみんな力で合わせて取り組もうという熱気に包まれ、連日怒濤の準備の日々も、やって良かったと思えました。

1年間ありがとうございました。



さわやか活動日記(抄)

今月号より地域支援事業の活動は、注目の支援をピックアップしてご報告します。2月の全報告は当財団ホームページにアップしていますので、ぜひそちらもご覧ください。

SCⅡ生活支援コーディネーター

広くて寒い北海道が、今、熱い!

3者協議体会議と情報交換会の取り組み

■北海道 ■担当 共生社会推進リーダー・澤美杉

「やっと、リアルで皆さんに会えるノ」2021年10月13日、私は少し緊張した面持ちで、でも少し胸を躍らせて札幌に。この日は第34回北海道協議体会議。北海道では14年から、北海道、北海道社会福祉協議会、当財団と道内のさわやかインストラクターの3者が連携

協力し、地域支援事業、特に生活支援体制整備事業の推進に向けて話し合いを続けている。
私は、北海道を担当し始めた当時、この3者連携がこんなに長く継続できている事実に大変驚いた。道、道社協、財団の担当者の人れ替わりがあったにもかかわらず

わらず、ブレることなく連携できたのは、さわやかインストラクターの継続的な関わりがあったからこそ。

3者協議体会議では、北海道の現状を共有し、生活支援体制整備事業を推進するために、どんなことに取り組むのか、各々の立場でざつくばらんに意見交換、アイデア出しをしている。その結果、22年には宗谷管内(稚内)、留萌管内(苫前)で「支え合いの地域づくり研修会」を開催。

この研修会の特徴は、研修会終了後の「個別相談会」。私たちにとっては挑戦だ。「この研修会を講義とグループワークで終わってしまったのではなく、せっかくなので、お土産を持って帰れるようにしよう」「相談し

て、アドバイスをもらえ。それだけでなく、その後も私たち3者は本気で支援しますよ、って伝えたい!」

「これって、すごいことなんじゃない? 3者だからこそできることなんじゃない?」3者協議体会議で少し興奮気味に語り合い、実現したことだ。もちろん、申し込みゼロも覚悟。でも、やらずに後悔するよりは、とにかくやってみることに。ふたを開けてみると、個別相談会は2件ずつ。うれしいことに、当日申し込みもあった。3者協議体のメンバーだけでなく現地の振興局職員と一緒に相談に乗ることができたのも大きな収穫だった。振興局職員がサポートを提案してくださったことに地元のSCの皆さま

んは驚き、喜びを隠せない様子だった。私たちにとっても、うれしい瞬間だった。

もう一つ特筆したいのは、北海道ブロックで取り組んでいる振興局単位の情報交換会。22年度には石狩管内、後志管内に加えて、釧路・根室、オホーツク、空知、宗谷の各振興局単位で実施。参加者は、フォーマルな研修会では語れないような本

事業開始から8年、活動見つめ直す機会を

■ 埼玉県志木市 ■ 担当 共生社会推進リーダー・岡野 貴代

2月14日、埼玉県志木市において「生活支援体制整備事業勉強会」が開催された。

対象は、第1層・第2層 S C、第1層・第2層協議体のメンバー。担当課の長

音や悩みを語り、知恵をもらい、心が元気になって帰路につく。

2つとも、「S Cも行政担当者も一人で抱え込まなくていい、サポーターは身近にたくさんいる」。こんなメッセージを届けることのできる取り組みだ。今、この貴重な瞬間に立ち会えることをありがたく思う。

寿応援課だけでなく、共生社会推進課も参加するなど、勉強会に関心を寄せたオプザーバー参加もあった。

同市は早くから生活支援体制整備事業に積極的に取り組む、2015年より第

1層・第2層S C、協議体を設置している。18年には、若い人にも助け合いに関心を持つてもらおうと、第1層協議体が「いろはふれあいまつり」の開催場所でのフォーラムを企画。第1部

では当財団の堀田力会長（当時）による基調講演、第2部では「ぼく・わたしの未来デザインコンテスト」を行い、小学生たちに「自分が高齢者になったときに、地域がどうなっていてほしいか」を絵や作文で書いてもらい、表彰式を行うなど、ユニークな取り組みも行ってきた。

協議体の活動は活発であるものの、発足から8年が経過し、何のためにこの活動をしているのかが分からなくなってきたという声も聞か

れるようになったという。そこで、協議体の活動をあらためて見直すために14日の勉強会が企画された。

行政担当者の小峰純希氏は、勉強会企画にあたり埼玉県総合支援チームによるアドバイザー派遣を県に依頼。生活支援アドバイザーである財団と埼玉県社会福祉協議会の松田亮氏の2人が講師を務めた。講演だけでなく質疑応答においても、それぞれのアドバイザーの知識や強みを生かした支援が行えたのではないかと感じていた。

この勉強会を企画した小峰氏は、あらためて同事業を学び直した感想として、第1層と第2層の間での情報共有やコミュニケーションに課題があることを感じ

たという。あわせて、担当課と関係課の間での情報共有を習慣化し、他課も巻き込みやすい体制づくりの構築、事業名の浸透や新規参画者の理解を促すための勉強会の定期的開催の必要性

協議体会議で

活気あふれる情報交換

■大阪府岬町

〔2月28日〕岬町では第2層・第3層の活動が活発で、さまざまな助け合い活動が始まっている。第1層協議体は、メンバーである各種団体の代表者が活動の情報を共有し、また、団体同士の連携強化の場として年2回会議を行っている。昨年8月の第1回会議は、メン

など、多くの気づきを得たと、まとめを作成して送ってくれた。

同事業では、何のためにこの活動を行っているのかを常に意識して進めていくことが必要となる。開始か

バーの介護事業所から「今後の岬町の姿、事業所としての関わり」等について意見があり、意見交換を行った。

第2回の今回は、担い手不足、後継者問題について考えるグループワークを中心に、各団体の活性化・連携強化に向けた意見交換を行った。始めに、担い手の掘り起こしについて話し合うきっかけとして、当財団よりエピソード（認知症の

ら8年が経過し、事業に携わる関係者も変わってきており、行政担当者も協議体も、事業への認識がずれていると感じる自治体も多いのではないだろうか。

今回の志木市の取り組み

人を支える担い手の発掘事例）を話した。

その後、グループワークを2回行った。1回目は、各団手で担い手をどのような発掘しているか、どんな活動をしているか話し合い、各グループから発表してもらった。それを受けて2回目は、今後の担い手発掘のアイデア出しを行った。各グループの発表では、「昼間歩いている人に定年退職はいつか聞いてみる」「介

のように、アドバイザー派遣等を活用して関係者全員が学び直す機会を持ち、それぞれがそれぞれの立場で方向性を見つめ直す機会を設けてみてはいかがだろうか。

護事業所の送迎の車の中でも周知し、家族に知ってもらう」「楽しくボランティア体験してもらうことでもる気を引き出す」など同町話盛り上がり、活気ある協議体会議となった。

最後に財団より、「今回出たアイデアを23年度にかなげ、実行していきましょう。そしてアイデアを各団体に持ち帰り共有し、団体内でもできることを探して

いきましよう。SCや社協、行政と一緒に活動を継続していましよう」とまとめた。同町の第1層SC中家裕美氏は、経験7年。地域にしつかり入り込み、各団体とのネットワークづくりにも取り組み、専門職との連携も進めており、ますますあたたかく活気ある岬町になると実感した。今後も応援していく。

(目崎 智恵子)

SCらが今後の活動に向けてグループワーク 地域性を考慮した 情報交換会開催

福井県

〔2月1日〕福井県主催で、県内嶺南地区の生活支援コ

ーディネーター情報交換会が開催され、当財団も協力した。

同県では昨年11月、SCと行政担当者を対象に、参加者への事前アンケートも加味した内容で「令和4年度生活支援コーディネーター養成全体研修会」を実施。長野県小布施町第1層SCの伊藤由花氏と、福井県越前市第2層SCの北畑英子氏による実践報告やグループワークを行った。久しぶりの集合形式での研修に、参加者の反応は良好だった。

その後、できるだけ地域状況を合わせ、参加人数を少なくしてもっと話しやすい研修をと、県内を嶺北・嶺南の2地区に分けた情報交換会を企画。今年1月には嶺北地区で実施し、約30

名が集合形式で参加した。

2月1日は嶺南地区でも嶺北地区と同様の内容で実施し、約20名が参加（大雪のためオンライン開催に変更）。財団は冒頭の講演と、グループワークの進行・アドバイザー、質疑応答・講演・まとめを行った。前半のグループワーク「ニーズの把握」「担い手発掘」、後半のグループワーク「居場所づくり」「外出支援」「有償ボランティア」ともに、それぞれがテーマを選択して話し合いを実施。昨年11月の研修以降に各地で活動したときの課題や、今後の展開方法等について活発な意見が交わされ、ヒントをつかんでもらった。

研修後アンケートでは、「グループワークが良かった」との声とともに「もっと情報交換の時間を増やしてほしい」「他市町村の事例をもっと知りたい」という意見も多く見られ、各地のSCがさらに情報を欲していることが分かった。その他、「男性の活動参加を増やしたい」「住民との信頼関係づくりのために、住民同士の交流や課題共有のための話し合いが大切だと思った」「既存の近所の集まりや組織の活用という視点にも注意して、今後の活動を考えたい」といった意見も寄せられた。これらの意見を取り入れ、今後も引き続き支援していく。

(高橋 望)



各協議体の違う悩みを共有、活動意欲につなげる

第2層協議体 情報交換会

長崎県時津町

〔2月10日〕2018年に当財団も協力した住民フォーラムから勉強会を3回行い、第2層1圏域（東小校区）の協議体を立ち上げた時津町。20年度には北小校区、22年度にも時津小校区と鳴鼓小校区で協議体が立ち上がり、全4圏域の第2層が編成された。早くから取り組みが進む東小校区や北小校区は、有償ボランティアや居場所など助け合いの創出も始まっているが、課題も生まれている。立ち上がったばかりの2圏域はニーズの掘り起こし、何か

ら取り組むかなどが課題。それぞれに違った悩みを抱える中、どう進めればよいか相談を受け、財団から情報交換会を提案。当日は「住民主体助け合いの地域づくりを広げる」ということを柱に、助け合いを広げるためのポイント、今後の仕掛けとして意識していくこと、他組織との連携、求められる協議体の役割について財団が講義、4圏域から約50名が参加した。

第1層SCらが中心となり勉強会を重ね、ボトムアップで協議体を立ち上げてきた経過があるからか、皆さん生き生きとして熱心さが伝わってきた。講義後のグループワークは、各グループに4協議体メンバーが交じって行われ、付箋を貼

った模造紙を立ち上がって眺めながら熱く議論するグループもあった。

発表では、「日頃のつながりの再構築が大切。他の協議体のメンバーにも自分たちの協議体に参加してもらい、取り組みを紹介してもらおう」「自治会や民生委員など地縁組織との連携が大切。出向いて協議体の必要性や取り組みを説明したい」「閉じこもりがちの人に声をかけて引っぱり出したい。その人の同級生などつながりのある人に声を

かけることなどを意識して取り組んでいきたい」「新住民とも共通テーマで話し合いを行っては」など積極的な働きかけのアイデアがたくさん出され共有した。

「初めて会った人同士とは思えない。楽しかった！もっと情報交換したい」という発言には、会場があたたかい笑いに包まれた。主体的な住民と一緒に話し合う機会で共感が広がり、さらに住民に働きかけようという意欲が高まる機会となった。（鶴山 芳子）

かながわ高齢者保健福祉計画評価・推進委員会 第36回計画評価部会開催

〔2月1日〕かながわ高齢者保健福祉計画評価・推進委員会第36回計画評価部会

が開催された。令和3年度の神奈川県の高齢者保健福祉計画における介護保険事

業実績と高齢者保健福祉計画（第8期・令和3～5年度）の中の主要施策評価について各事業の自己評価・施策別評価・総合評価の説明があり、橋本廸生部会長（横浜市立大学名誉教授）の進行で議論した。令和2年度に比べ、令和3年度はコロナ感染対策が進み、実績が増えた様子を共有。各自治体の委員がそれぞれの自治体の状況と意見を述べた。

また、主要政策の評価について意見交換が行われた。「県の事業の中には直接住民に関係するものとそうでないものがあるが、同列に評価してしまっていないものか」という指摘があった。当財団からは、県の事業評価ではあるが「人口減少社

会において、どの事業にも住民が主体的に参加していくことが必要になってくる中で、計画そのものに住民の声をどれだけ反映させているかということも重要になってくるのではないかと」と発言した。「市町村の支援計画という性質で、直接住民の声を反映するのは難しい部分もあるが、何ができるか考えていきたい。まずは確かにある。事業を行うにあたりアンケートを取るなど、住民の声を聞きながら生かしていくことの必要性はあり、事業の質を担保する取り組みはしっかりやっていきたい」と事務局からコメントがあった。

「さまざまな調査の中で、全体的な幸福感を感じてい

る人の割合を上げていこうとアンケートを取っている自治体もある。そういった測り方もあるのではないかと」との意見や、「全体としてアウトプット評価が多いように思う。令和5年度以降、アウトカムとアウトプットの観点から全体的にどこまでできそうかを検討

していてもいいのではないかと」との意見も出た。多様な事業がある中で、評価のあり方も少しずつ進化していくのではないかと感じました。（鶴山 芳子）

（本稿後半は、共生社会推進リーダーが各々執筆）

役員就退任のお知らせ

【退任】（3月31日付）

堀田 力 会長・理事

（関連→ 表紙裏、P2～5）

【就任】（3月22日付）

鶴山 芳子 常務理事（業務執行理事）

退職のお知らせ

（3月31日付）

■ ふれあい推進事業

原島 敏子さん

原島さんには、さわやかなインストラクターとの連携、「連合・愛のカンパ」、その他財団の運営において長年ご尽力いただきました。大変お疲れ様でした。

2023年度

※2023年3月22日現在の予定。

金額の数字は各事業の直接事業費予算額、1万円未満は省略しています。

実施事業・プロジェクトをご紹介します。

2023年度の実施事業・プロジェクトの予算が決定しました。

新年度も、新しいふれあい社会づくりに向けて、財団一同邁進いたします。

皆様のご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ふれあい推進事業

2億3822万円

- ①生活支援コーディネーター・協議体支援プロジェクト
- ②ブロック等との協働戦略プロジェクト
- ③地域共生推進・助け合い拠点づくりプロジェクト
- ④ふれあいの居場所推進プロジェクト
- ⑤立ち上げ支援プロジェクト
- ⑥復興支援プロジェクト

社会参加推進事業

3291万円

- ①社会人地域共生活動参加推進プロジェクト
- ②子ども育成支援プロジェクト
- ③スポーツふれあいプロジェクト

- ④民間支援創出プロジェクト

情報・調査事業

1億209万円

- ①情報誌発行プロジェクト
- ②統括広報プロジェクト
- ③調査政策提言プロジェクト
- ④地域助け合い情報活用研究プロジェクト

収益事業

1884万円

- ①不動産賃貸等事業

今年度より、新地域支援事業担当リーダーは共生社会推進リーダーに、新地域支援事業マネジャーは共生社会推進マネジャーに名称が変更となります。

みんなの広場



高齢者と子ども
分けない政策を

水野 さやかさん

愛知県

昨年12月号の巻頭言にあった、A
ーを活用した「オリヒメカフェ」に
興味を持ちました。

今後、女性の老後問題を深掘りし
て、実体験などを載せてほしいで
す。また、子育て世代なので、今後
の子ども政策が気になります。高齢
者と子どもを分けずに考えた政策が
あってほしいと感じています。

ご提案ありがとうございます。子
ども政策も提言していきますので、
ぜひご意見をお寄せください。





『さあ、言おう』投稿募集

あなたの意見を社会へ生かそう

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる
問題提起型情報誌です。

ぜひ皆様の声をお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について など

投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。
ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前ほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添え下さい。大変参考になります。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX (03) 5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp



『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856*

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

*払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp



編集後記 ●堀田力会長が退任しました。財団一同、「新しいふれあい社会」の実現に向けて、より一層邁進いたします。変わらぬご支援をよろしく願いいたします。(表紙裏、P2～、P6～「巻頭言」)。●「活動の現場から」は、中学生による高齢者のごみ出しのお手伝いと、それを見守る周囲の人たち。心あたたまる活動です(P8～)。●「地域と子ども」をテーマとした企画がスタートしました。ご期待ください(P12～)。●子ども・子育て市民委員会が、第2弾のシンポジウムを開催します。ご参加をお待ちしています！(裏表紙)

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

鎌田
實

1歳8か月で親に手放された。

だけど、貧乏な夫婦が拾って育ててくれた。

たくさんの人に助けってもらって、今がある。

若い夫婦が安心して子どもを産み育てられる

世の中にしたかったら、

子ども・子育て市民委員会を作った。

たくさんの人に応援してもらいたいなあ。



裏表紙のシンポジウムでも進行役を務めます。
ぜひ皆さんご参加ください!

● 医師・作家

チェルノブイリ、イラク、ウクライナ、
シリア…そして日本。

困難の中にある子どもたちに、手を差し
伸べ続けたいと思っています。

すべての子どもたちに、未来を!

「あまのこ」 4月号

通巻356号 2023年4月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

Printed in Japan

子ども・子育て市民委員会

シンポジウム **第2弾**

開催します!!

子どもを生き育てやすい
社会の条件整備を皆で考えましょう



日時：4月24日(月)

13:20~16:40

会場：砂防会館 別館1階

シェンバツハ・サボー 利根会議室

(東京都千代田区平河町 2-7-4)

◆ 基調講演

「次元の異なる少子化対策とは

経済支援・子育てサービス充実・仕事と育児の両立」

小倉 将信 内閣府特命担当大臣(少子化対策、男女共同参画)、
こども政策担当、共生社会担当、女性活躍担当、孤独・孤立対策担当

◆ シンポジウム Part1

「子どもを生き育てやすい社会構造の変革と財源問題

妊娠・出産・子育てを社会全体で支えるための財源調達の手だては…」

◆ シンポジウム Part2

「子育て支援政策は社会構造の変化がカギ

子どもを生き育てやすい社会の条件整備で社会構造を変えるには」

* 詳細は子ども・子育て市民委員会ホームページをご覧ください

<https://www.kodomokosodate.jp>

(当財団ホームページからもアクセスできます)

〈お問合せ〉 TEL (03) 5470-7751

